



日本本土初空襲記事 国民新聞・都新聞より

昭和十七年四月十八日、日本本土初空襲で尾久が被災しました。国民新聞・都新聞（東京新聞の前身）の記事です。※当時、新聞紙等掲載制限令（国家総動員法に基づき新聞紙等への記事掲載の制限を規定した勅令 昭和十六年）施行されていたため、具体的な被災状況は掲載されていません。

敵爆弾の威力恐るゝに足らず

東部軍司令部発表（十八日午後四時三十分）
（一）皇室の御安泰にわたらせたることは我々の等しく慶祝に耐へざる所なり（二）防空監視隊の敵機発見及びその報告極はめて迅速にして適時空襲警報発令し得たり（三）敵の空襲は穴地防空部隊の奮闘と國民の沈着なる動作とにより危害を最小限に止め得たり、國民各位今後も防火消化の準備に邁進せられたし、敵は若干の爆弾の外は焼夷弾を主として使用せり、焼夷弾は二キロのものがなるが如くその威力は何等恐るゝに足らざるも屋根を貫き天井裏に止まるものあり注意を要す（四）軍防空部隊もはじめての空襲に曾し士気極はめて旺盛にして更に来るべき敵に對し準備の體制あり（五）敵の攻撃により死傷せられたる軍官民に對し深甚大なる哀悼の意を表す
頼もしいこの落着き一絲乱れぬ隣組警防団 交通も整然 空襲下の帝都を見る
十八日小癩なる敵機の侵入に對して敢然と蹶起した帝都の相貌は闊ふ
民族が屈敵の気概を脈々と滾らせ七百萬

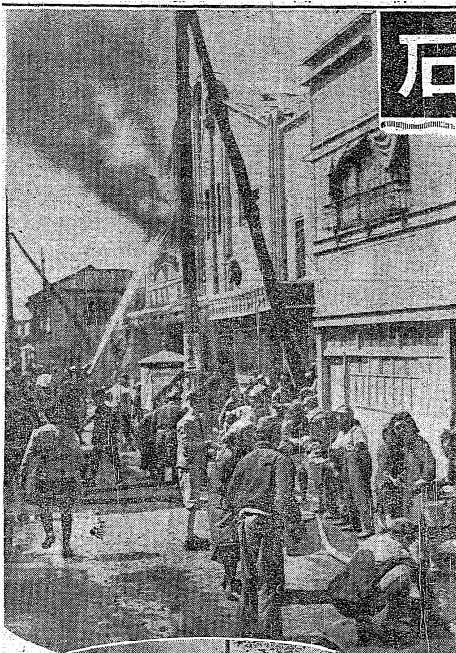
市民の一つに結ばれた心は微動だにもせざる鉄壁陣の首都を現出した、敵弾をあびた市内〇〇方面視察に自動車飛ばせる、市街はいささかの動揺の色も見うけられず市民が沈着冷静そのものの足どりで歩いてゆく、鉄兜姿凛然たる警防団員が交通整理に従っているが走る圓タクもトラツクもピツタリと止つてその指図にしたがひ交通道徳は整然と護られている、どの町もどの町も空襲警報の赤い旗がかゞげられ、町會や隣組の詰所には黒の巻ゲートルに軽装した警防団員モンペ姿に黒頭巾に身を固めた女性部隊が待機、空を睨む瞳も「敵機何するぞ」の逞しい決意に燃えてゐる、消防自動車も都大路をフル・スピードで縦横に疾駆するが、車馬の流れが極めて秩序正しいだけに少しも警笛を鳴らす必要もないほどに落ちついた状態なのだ、敵弾投下された現場は被害極めて軽微にとどまつたが、隣組の活動は平素の訓練に鍛へた腕を最高度に發揮し、實に見事に展開されたのであつた。

出かけたこの意気 帝都に咲いた防火美談
日頃の訓練に物を云はせて投下された焼夷弾を大事に至らずに消し止めた空襲下の帝都

に咲いた頼母しい美談の数々
東京北部井上辰九郎さん方で主人不在中女中二人留守居してゐるところへ二階に一箇、書生部屋に一箇、離れの部屋に二箇、庭に二箇の焼夷弾が落下、二女中さんはあわてず水道が断水してゐるので防空用桶の水を二人で順序よく汲んではかけ汲んではかけ大事に至らずに消止めた。

国民新聞一九四二年四月十九日朝刊
【日本本土初空襲】一九四二年四月十八日、太平洋上の空母を出撃した米軍「ドーリットル戦隊」の16機の双発爆撃機B25が飛来し、初弾が現在の東京都荒川区西尾久8、9丁目に投下された。旧陸軍や警視庁の資料によると、午後0時20分ごろ、爆弾3発と焼夷弾70発以上が住宅街を直撃、10人が死亡、重軽傷者48人、全焼全壊家屋52戸、半壊半焼家屋14戸の被害を出した。本来の目標は、対岸の足立区にあった東京電力千住火力発電所と北区赤羽の陸軍造兵廠（しよう）だったとされる。

2012年4月19日『東京新聞』「筆洗」より引用



頼もしい帝都防火群の活躍（中） 学校報國隊の働き（下右） 敵焼夷弾の残骸（同左） 天井を突抜けた敵焼夷弾（〇〇にて（陸軍省検閲済）